

『論語集注』（朱熹撰）の日本語訳（述而第七 上篇）  
—『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈—

Japanese Translation of “Lunyu Jizhu” (7) (Part 1)  
—Xi ZHU’s Interpretation of “Confucian Analects”—

孫 路 易  
SUN, Luyi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第56号 2023年12月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.56 2023

『論語集注』（朱熹撰）の日本語訳（述而第七 上篇）  
— 『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈 —

孫 路易

周知の通り、朱熹（一一三〇—一二〇〇。朱子は尊称）の『論語』

解釈は、中国思想の発展に寄与しただけではなく、日本や朝鮮半島などの東アジアの思想の発展にも大きな影響を与えたものである。だが、『論語集注』には「氣」「道」「心」「徳」「君子」「仁」「理」「性」「敬」等々の中国哲学の概念が随所に現れており、朱子哲学においてのそれらの概念の含意を明確に解明しない限り、朱子の『論語』解釈の内容を理解することは極めて難しいと思われるのである。

筆者は、長年に渡って朱子哲学の研究に力を注ぎ、いままでは既に、

- 一、「朱子の「太極」と「氣」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第七号、二〇一一年）
- 二、「朱子の「神」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第八号、二〇一二年）
- 三、「朱子の「心」」（京都大学『中國思想史研究』第三十四號、二〇一三年）
- 四、「朱子の「理」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第十号、二〇一四年）
- 五、「朱子の「情」」（岡山大学『大学教育研究紀要』第十一号、二〇一

一五年）

六、「朱子の「変化氣質」」（岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第四十三号、二〇一七年）

七、「朱子の「君子」」（岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第四十四号、二〇一七年）

八、「周易本義」と朱子哲学」（岡山大学『文化共生学研究』第十八号、二〇一九年）

などの論文を発表した。その朱子哲学の研究を通じて、筆者は、上記の幾つかの論文、及び『四書章句集注』（新編諸子集成、中華書局、一九八三年）と『朱子語類』（全八冊、宋・黎靖德編、王星賢点校、一九九四年）、特に『朱子語類』に所収の「論語（一〜三十二）」（卷第十九〜五十）に基づいての、『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈の現代日本語の完全翻訳を作成することが必要と強く思うようになったのである。

本稿では、『論語集注』（前掲の『四書章句集注』に所収）の「述而第七」の朱子の集注と『論語』述而第七の原文を、主に『朱子語類』に所収の「論語（一〜三十二）」と『朱子全書』（修訂本全二十七冊、

朱傑人、嚴佐之、劉永翔主編、上海古籍出版社、安徽教育出版社、二〇〇二年）に所収の『論語或問』などに記録されている朱子の説明に基づいて和訳することを試みる（紙幅の関係上『朱子語類』と『四書章句集注』からの引用は頁数等を明示しないことにする）。

朱子哲学における「氣」「理」「性」「仁」「徳」「道」「敬」「君子」「賢人」「聖人」「工夫」などの諸概念、その具体的な内容の要旨を、『論語集注』（朱熹撰）の日本語訳（公治長第五下篇）——『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈——（岡山大学『文化共生学研究』第二十一号、二〇一二年）の末尾に付録した。

## 述而第七

此篇多記聖人謙已誨人之辭及其容貌行事之實。凡三十七章。

本篇では、聖人が自身をへりくだって人を教誨する言葉、及び聖人の容貌や事跡の事実を多く記録している。全部で三十七章。

## 第一章

子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭。

〔述〕（述べる）は、ここでは、孔子が編纂したものとされている詩や書や周易や春秋などの経典はいずれも、「先王」（堯、舜、禹、成湯、文王、武王、周公など）の時代から伝わってきた昔の文献を伝えただ

けのもの、ということである。孔子は、「先王」たちの残したそれぞれの文献を集めてそれを折衷した（つまり、それを編集して行き過ぎることもなく及ばないこともなく偏りのないもの、即ち「六芸」に仕上げた）のである。「作」（作る）は、ここでは、「制作」、つまり、これまでなかったものを始めて創作したということである。「信」は、ここでは、「先王の道」（つまり、「王道」「仁政」のことであり、民心を得ることを根本とする政治政策を「人に忍びざるの心」（「仁」、つまり、慈愛の心のことであるが、「惻隠之心」（つまり深く悲しんで痛む心）でもあり、即ち、子供が井戸に落ちそうでその命が危うくなるのを見て心が深く悲しみ痛んで思わず救いたい、このような気持ち）で行う、ということ）を篤く信じる、ということである。「老彭」は、商（殷）の賢大夫で、古代の事を述べるのが好きで、「先王の道」を述べ伝えるだけで自ら制作することをしなかった、こういう人物である。孔子が言われた。「述べて（伝えるだけで）創作はせず、（先王の道を）信じて古代（の事を述べるの）が好きで、密かに（心の中で）我が老彭に比べている。」

集注…

「好」は、去声（第四声、つまり「好む」の意）である。「述」は、「旧を伝うるのみ」（孔子刪詩書、定礼楽、賛周易、修春秋、皆伝先王之旧」、つまり、「先王の旧」（ここでは、つまり、孔子が編纂したものとされている詩や書や周易や春秋などの経典はいずれも、「先王」（堯、舜、禹、成湯、

文王、武王、周公など)の時代から伝わってきた昔の文献)を伝えただけのものである、ということ。〔作〕は、「則ち創始なり。」(徐兪問、述而不作、是制作之作乎。曰、是。孔子未嘗作一事、如刪詩、定書、皆是因詩書而刪定。〕〔礼記〕樂記「作者之謂聖、述者之謂明。明聖者、述作之謂也。」集説「鄭氏曰、述謂訓其義也。孔氏曰、。述謂訓說理義。既知其文、故能訓說礼樂理義、不能制作礼樂也、ここでは、「制作」、つまり、これまでなかったものを始めて創作した、ということである。だから、「作」は聖人でなければできないことであるが、「述」は「賢者」(「夫子謂夷齊是賢人。恐賢者亦有過之者、於是問以決之、看這事は義理合如此否。」「君子不器、事事有些、非若一善一行之可名也。賢人則器、獲此而失彼、長於此又短於彼。賢人不及君子、君子不及聖人」、つまり、「賢人」のことである。「聖人」に次ぐのが「君子」で、「君子」に次ぐのが「賢人」である。)でもできることである。「竊かに比す」は、「尊ぶ」の意(つまり「心の中で尊敬している」の意)を表す言葉である。「我」は、「親しむ」の意(つまり「我が」の意)を表す言葉である。「老彭」は、商の賢大夫、「大戴礼」に見え(「大戴礼補注」虞戴德「子曰、否。丘則不能、昔商老彭及仲傀、政之教。」補注「包咸曰、老彭殷賢大夫。)、思うに、「古えを信じて伝述する者なり。」(「論語注疏」述而「竊比於我老彭。」何晏注「包曰、老彭、殷賢大夫、好述古事。我若老彭、但述之耳。」邢昺疏「作者之謂聖、述者之謂明。老彭、殷賢大夫也。老彭於時、但述修先王之道而不自制作、篤信而好古事。孔子言、今我亦爾、故云比老彭。猶不敢顯言、故云竊」、つまり、古代の事を述べるのが好きで、「先王の道」(「魯却不曾變壞、但典章廢墜而已。若得人以修拳之、則可以如王道盛時也。」

「問、天地以生物為心、而所生之物、因各得夫天地之心以為心、所以人皆有不忍人之心。曰、天地生物、自是溫暖和煦、這箇便是仁。所以人物得之、無不有慈愛惻怛之心。」〔論語集注〕雍也「魯一變、至於道。」朱子注「道、則先王之道也。」〔孟子集注〕離婁上「不行先王之道也。」朱子注「先王之道、仁政是也。」〔孟子集注〕梁惠王上「養生喪死無憾、王道之始也。」朱子注「王道以得民心為本、故以此為王道之始。」〔孟子集注〕梁惠王上「齊宣王問曰、齊桓、晉文之事可得聞乎。云々。」朱子注「此章言人君當黜霸功、行王道。而王道之要、不過推其不忍之心、以行不忍之政而已。齊王非無此心、而奪於功利之私、不能擴充以行仁政。」〔孟子集注〕公孫丑上「孟子曰、人皆有不忍人之心。。所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。」朱子注「天地以生物為心、而所生之物因各得夫天地生物之心以為心、所以人皆有不忍人之心也。」「怵惕、驚動貌。惻、傷之切也。隱、痛之深也。此即所謂不忍人之心也」、つまり、「王道」「仁政」のことであり、民心を得ることを根本とする政治政策を「人に忍びざるの心」(「這箇便是仁」「慈愛惻怛之心」、つまり、「仁」)であり、慈愛の心のことであるが、「惻隱之心」(つまり深く悲しみ痛む心)でもあり、ここでは、即ち、子供が井戸に落ちそうであるのを危うくなるのを見て心が深く悲しみ痛んで思わず救いたいこのような気持ち)で行う、ということ)を篤く信じて述べて伝えた、こういう人物である、ということ。孔子は、「詩書を刪り、礼樂を定め」(「行夫問述而不作章。曰、雖說道其功倍於作者、論來不知所謂刪者、果是有刪否。要之、當時史官收詩時、已各有編次、但到孔子時已經散失、故孔子重新整理一番、未見得刪與不刪。如云、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。

云各得其所、則是還其旧位。」問、定礼楽、是礼記所載否。曰、不見得。『史記』孔子世家「孔子之時、周室微而礼楽廢、詩書缺。追迹三代之礼、序書伝、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。…故書伝、礼記自孔氏。」「古者詩三千余篇、及至孔子、去其重、取可施於礼義、上采契后稷、中述殷周之盛、至幽厲之缺、始於衽席、故曰、闕雖之乱以為風始、鹿鳴為小雅始、文王為大雅始、清廟為頌始。三百五篇孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。礼楽自此可得而述、以備王道、成六芸、つまり、散逸した詩と書を新たに整理してそれによつて楽と礼を復元した、ということ、「周易を賛し」(節復問、賛易之賛。曰、称述其事、如大哉乾元之類是賛。『周易本義』象上伝「大哉乾元、万物資始、乃統天。」朱子注「象、即文王所系之辭。伝者、孔子所以釈經之辭也。後凡言伝者、放此。此專以天道明乾義、又析元亨利貞為四德以發明之。而此一節、首釈元義也。大哉、歎辭。元、大也、始也。乾元、天德之大始。故万物之生、皆資之以為始也。又為四德之首、而貫乎天德之始終、故曰統天。」「史記集解』孔子世家「孔子晚而喜易、序、象、繫、象、説卦、文言。説易、韋編三絶。」正義「夫子賛明易道、申説義理、釈乾坤二卦經文之言、故称文言」、つまり、「周易」を解釈してその含意を明らかに記述する、ということ、「春秋を脩む」(又問、如何作春秋、恐是作否。曰、其事則齊桓晉文、其文則史、其義則丘竊取之矣。看来是寫出魯史、中間微有更改爾。某嘗謂春秋難看、平生所以不敢説著。如何知得上面那箇是魯史旧文、那箇是夫子改底字。若不改時、便只依魯史、如何更作春秋做甚。先生徐云、知我者其惟春秋乎。罪我者其惟春秋乎。又公羊穀梁伝云、其辭、則丘有罪焉耳。這是多少擔負。想亦不能不是作、不知是如何。『春秋左氏伝』

序「説者以為仲尼自衛反魯、脩春秋、立素王、丘明為素臣。」「史記集解』孔子世家「子曰、弗乎弗乎、君子病没世而名不称焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉。乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。據魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博。」索隱「言夫子修春秋、以魯為主、故云據魯。親周、蓋孔子之時周雖微、而親周王者、以見天下之有宗主也」、つまり、魯国の歴史をもとに『春秋』を作成した、ということ。朱子は、「春秋』はどの部分が魯の歴史なのか、どの部分が孔子の改変したものなのか、明確でないから、読みにくい書物である。孔子の改変した部分があれば、「作」と言うこともできなくはないが、どうなっているのかは知らない。」と説明している。(いずれも「先王」の時代から伝わってきた昔の文献を伝わる(述)だけのものであつて、これまでなかったものを始めて創作する(制作)「作」ことはしなかった。それゆえに、その自叙がこのようである。思うに、ただ敢えて「作者の聖」(つまり、「制作」の聖人)を自任することとをしないだけでなく、また敢えてはつきり古代の賢人に比べることもしないのである。思うに、「其の徳愈々盛んにして心愈々下り」(孟子集注』尽心下「動容周旋中礼者、盛徳之至也。」朱子注「細微曲折、無不中礼、乃其盛徳之至。自然中、而非有意於中也。」「周易本義』繫辭伝「窮神知化、徳之盛也。」朱子注「下学之事、尽力於精義利用、而交養互発之機、自不能已。自是以上、則亦無所用其力矣。至於窮神知化、乃徳盛仁熟而自致耳。然不知者、往而屈也。自致者、来而信也、是亦感応自然之理而已。張子曰、氣有陰陽。推行有漸為化、合一不測為神」、つまり、その徳が盛んであればあるほど心がますます謙虚になる、ということ。「徳盛」とは、仁の徳が円熟

の域に達して、どんなに細かい行い（発言を含む）でも意識しなくても自然にすべて「礼」（つまり「理」）に合う、ということである）、その言葉使いが謙遜であることを自覚していなかったのである。しかし、その時には、作成したもの（つまり「六芸」）がほぼ完成したから、孔子は、思うに、「群聖の大成を集めて之を折衷す。」（陶安国問、降衷之衷與受中之中、二字義如何。曰、左氏云、始終而衷挙之。又曰、衷甲以見。看此衷字義、本是衷甲以見之義、為其在裏而当中也。然中字大概因過不及而立名、如六芸折衷於夫子、蓋是折兩頭而取其中之義。後人以衷為善、却說得未親切。」問、折衷之衷。曰、は無過些子、無不及些子、正中間。又曰、是恰好底。」「中、如字、即其中也。中、音衆、則是当之義、謂適當其中也。如六芸折衷音衆。於夫子。亦謂折當使歸於中之義。中與所以謂之中、音衆。以適當其中如字。而異也。」「孟子集注」万章下「孔子之謂集大成。」朱子注「此言孔子集三聖之事、而為一大聖之事。猶作樂者、集衆音之小成、而為一大成也。成者、樂之一終、書所謂簫韶九成是也」、ここでは、つまり、「先王」たちの残したそのそれぞれの文献を集めてそれを折衷した（つまり、それを編集して行き過ぎることもなく及ばないこともなく偏りのないもの（つまり、詩、書、周易、春秋、礼、楽の「六芸」）に仕上げた）のである。）そのこと（つまり「詩書を刪り、礼楽を定め、周易を賛し、春秋を脩む」のこと）は「述」（と孔子がおっしゃっているの）であるが、しかし功績は「作」に倍するものである。このこともまた知らなくてはならないのだ。

好、去聲。○述、傳舊而已。作、則創始也。故作非聖人不能、而述則賢

者可及。竊比、尊之之辭。我、親之之辭。老彭、商賢大夫、見大戴禮、蓋信古而傳述者也。孔子刪詩書、定禮樂、贊周易、脩春秋、皆傳先王之舊、而未嘗有所作也、故其自言如此。蓋不惟不敢當作者之聖、而亦不敢顯然自附於古之賢人。蓋其德愈盛而心愈下、不自知其辭之謙也。然當是時、作者略備、夫子蓋集羣聖之大成而折衷之。其事雖述、而功則倍於作矣、此又不可不知也。

## 第二章

子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。

孔子が言われた。「仁のことを話していない時にも仁の徳が常に心に存していること、事事物物の「理」（つまり性質）を窮め尽くすのを間断なく続けること、人々のことを自分のことのように切実に思つて仁のことを人々に教えて人々にも仁の徳を全うさせるように仁を人々に及ぼすこと、この三つの事柄は私にはどれもないのだ。」

（朱子にあつては、「循理」は即ち「仁」、即ち「善」であり、これに對して、「背理」は即「不仁」、即ち「悪」である、と考えられている。「循理」とはつまり、視聽言動がすべて事物の性質に従つて行われることである。詳しくは拙稿「朱子の「理」（前掲）。本章について朱子は「孔子の）謙して又た謙するの辞なり。」と説明している。）

集注：

「識」は、「志」と発音するが（つまり、「覚える」「記憶する」の意）、また字の通りである。「識」は、「記」（「魄は如水、人之視能明、聽能聰、心能強記憶也。」「能記憶弁別者、魄之為也」、つまり、覚えること、記憶すること）である。「默識」は、「言わずして諸れを心に存するを謂ふなり。」（「默而識之者、默不言也、不言而此物常在也。今人但說著時在、不說時不在。非礼勿視、要和根株取、不是只禁你看。聽、言、動皆然。」「若默而識之、乃不言而存諸心、非心與理契、安能如此。」「問、默而識之。曰、是得之於心、自不能忘了、非是聽得人說後記得」、つまり、これを話していない時にもこれが常に心に存している、ということ。これ（つまり「仁」の徳）を得て（つまり天より稟受して）心に存して視聽言動が皆常に「礼」（つまり「理」）に合う、ということである。）、「一説に、識は、知なり。言わずして心に解するなり。」（『礼記集説』哀公問「公曰、寡人蠢愚冥煩、子志之心也。」衛湜集説「鄭注云、志読為識、識、知也。冥煩者、言不能明理、此事子之心所知也」、つまり、一説の「識は、知なり」は鄭玄の説であり、「識」とは心の中で知っているということであり、口に出さず心の中で知っているのである、ということ。）前の説（つまり「識は、記なり」が正しい説に近い。「何れか我に有らんや」とは、何者か能く我に有らんやと言ふなり。）（「問、何有於我哉、恐是聖人自省之辭。蓋聖人以盛徳之至、猶恐其無諸己而自省如此、亦謙己以勉人之意。曰、此等処須有上一截話。恐是或有人説夫子如何、故夫子因有此言。如達巷党人所言如此、故夫子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣。今此章却只是記録夫子之語耳。如曰、二三子以我為隱乎。吾無

隱乎爾。亦必因門人疑謂有不尺與他說者、故夫子因有是言也。」「鄭問、何有於我哉。曰、此語難說。聖人是自謙、言我不曾有此教者。聖人常有慊然不足之意。衆人雖見他是仁之至熟、義之至精、它只管自見得有欠闕处」、つまり、「何れか我に有らんや」とは、「その三つの事柄は私にはどれも無いのだ」の意、ということ。「何れか我に有らんや」は、孔子が自ら謙虚にまだ不足なところがあるという意味で述べられた語である。）（「三者」（「宜久黙黙而識之章。曰、此雖非聖人極致、然豈易能。默而識之、若不是必與理契、念念不忘者不能。学不厭、如人之為学有些小間斷時、便是厭。教不倦、如以他人之事為不切於己、便是倦。今学者須是將來此三句時時省察、我還能默識否、我学還不厭否、我教還不倦否、如此乃好。」「默而識之、至誨人不倦、是三節。雖非聖人之極致、在学者亦難。如平時講貫、方能記得。或因人提撕、方能存得。若默而識之、乃不言而存諸心、非心與理契、安能如此。学不厭、在学者久亦易厭。視人與己若無干涉、誨之安能不倦。此三者亦須是心無間斷、方能如此。」「説默而識之章、曰、此必因人称聖人有此、聖人以謙辭答之。後來記者却失上面一節、只做聖人自話記了。默而識之、便是得之於心。学不厭、便是更加講貫、誨不倦、便是施於人也」、つまり、「黙して之を識す」（つまり、「仁」のことを話していない時にもこれが常に心に存している、ということ）、「学びて厭わず」（「学不厭者、智之所以自明。」「学不厭、所以成己、而成己之道在乎仁。」「中庸」「成己、仁也。成物、知也。」朱子注「知、去声。誠雖所以成己、然既有以自成、則自然及物、而道亦行於彼矣。仁者体之存、知者用之發、是皆吾性之固有、而無内外之殊。既得於己、則見於事者、以時措之、而皆得其宜也」、つまり、「学」（『論語集注』

為政「子曰、吾十有五而志于学。」朱子注「古者十五而入大学。心之所謂之志。此所謂学、即大学之道也。志乎此、則念念在此而為之不厭矣」、つまり、「大学の道」（大学之道、所以在致知、格物。格物、謂於事物之理各極其至、窮到尽頭。「大学之道不曰窮理、而謂之格物、只是使人就実処窮竟。事物物上有許多道理、窮之不可不盡也」、即ち、「格物」「窮理」のことであり、事事物物の「理」（性質）を窮め尽くすこと）を間断なく続けること、「教えて倦まず」（教不倦者、仁之所以及物。「教不倦、所以成物、而成物之功由乎知。」『論語集注』述而「子曰、若聖與仁、則吾豈敢。抑為之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣。」朱子注「此亦夫子之謙辭也。聖者、大而化之、仁、則心德之全而人道之備也。為之、謂為仁聖之道。誨人、亦謂以此教人也」、つまり、人々のことを自分のことのように切実に思つて「仁」を人々に教へて、人々にも「仁」の徳を全うさせるように「仁」を人々に及ぼす、ということ）の三つの事柄）は、すでに聖人の為すことの中では究極のものではないが、それでも「敢えて当たらず」（つまり、「何れか我に有らんや」とおっしゃったことは、遡つてまた遡つての言葉である。

識、音志、又如字。○識、記也。默識、謂不言而存諸心也。一説、識、知也、不言而心解也。前説近是。何有於我、言何者能有於我也。三者已非聖人之極至、而猶不敢當、則謙而又謙之辭也。

### 第三章

子曰、徳之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也。

〔徳〕は、「道理」「理」を稟受して既に心に備わっているものであり、即ち「仁義礼智」の「性」である。ここでは、人を害する心がなければ、これが「仁」の徳であり、「穿窬」（つまり、外面と内実とが相違があり、心が正直でなく「私意」（つまり私意・憶測）があること）の心がなければ、これが「義」の徳である。人を害する心があれば「仁」の徳を修めていないことである、「穿窬」の心があれば「義」の徳を修めていないことであるが、「誠意」「正心」（つまり、「心」がそれぞれの事物のその「理」（つまり性質）に従つてその働き（つまり「意」を行うこと）は、徳を修める具体的な内容であり、日々間断なく行われて（つまり「篤行」）はじめて徳が修められるのである。「講学」とは、「博学」、「審問」、「慎思」、「明辨」のことであり、即ち「致知」「格物」（つまりあらゆる事物の「理」（つまり性質）を窮め尽くすこと）である。「義」は「宜」であり、事においてそれが適宜の状態（つまりその事物の「理」（つまり性質）に合う状態）のことを「合宜」と言う。「徙義」とは、事においてそれが適宜の状態ではないのを見てそれを適宜の状態にさせることである。「不善」は、ここでは、「過」であり、つまり「私意」のことである。「改過」はつまり、「私意」があればそれを取り除くのに躊躇わないということである。孔子が言われた。「徳を修めない、学を講じない、義を聞いて徙（うつ）ることができない（つまり、事においてその適宜の状態ではないのを見てそれを適宜の状態にさせられない）、過ちを改められない（つまり「私意」を取り除くのに躊躇う）、これらは、私の憂いだ。』



「曰、知與行、工夫須著並到。失(知?)之愈明、則行之愈篤。行之愈篤、則知之益明。二者皆不可偏廢。如人兩足相先後行、便会漸漸行得到。若一辺軟了、便一步也進不得。然又須先知得、方行得。所以大学先說致知、中庸說知先於仁勇、而孔子先說知及之。然學問、慎思、明辨、力行、皆不可闕一。」夫是五者、無先後、有緩急。不可謂博學時未暇審問、審問時未暇慎思、慎思時未暇明辨、明辨時未暇篤行。五者從頭做將下去、只微有少差耳、初無先後也。」とあり、中国哲学における「知」と「行」の問題についての朱子の考えが知られるのである。

集注・

尹氏(前出)が言った。「徳は必ず修めて後に成り」(「曰、須実見得是如此。徳は甚麼物事。如何喚做修。如何喚做不修。人而無欲害人之心、這是徳、得之於吾心也。然害人之心、或有時而萌者、是不能修者也。徳者、道理得於吾心之謂。修者、言好修治之之謂、更須自体之。須把這許多說話做自家身上說、不是為別人說。」「明德者、人之所得乎天、而虛靈不昧、以具衆理而応万事者也。」「或問、明德便是仁義礼智之性否。曰、便是。」「徳之不修。如有害人之心、則仁之徳不修。有穿窬之心、則義之徳不修。仁之徳修、則所言無不仁之言、所行無不仁之行。義之徳修、則所言無不義之言、所行無不義之行。」「誠意、正心、修身是修徳。」「篤行、所以固執而為仁、利而行也。」「曰、徳是理之既得於吾心者、便已是我有底物事了。更須日日磨礱、勿令間斷、始得、」つまり、「徳」は、「道理」「理」

を天から稟受して既に心に備わっているものであり、即ち「仁義礼智」の「性」である。人を害する心がなければ、これが「仁」の徳であり、「穿窬」(不直心而私意如此、便是穿窬之類。又云、裏面是如此、外面却不如此。外面恁地、裏面却不恁地。」「問、色厲而内荏、何以比之穿窬。曰、為他意只在要瞞人、故其心常怕人知、如做賊然。」「又問、餽者、探取之意、猶言探試之探否。曰、餽、是鉤致之意。如本不必説、自家却強説幾句、要去動人、要去悅人、是以言餽之也。如合當與他說、却不説、須故為要難、使他來問我、是以不言餽之也。」「論語集注」陽貨「子曰、色厲而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。」朱子注「厲、威嚴也。荏、柔弱也。小人、細民也。穿、穿壁。窬、踰牆。言其無実盗名、而常畏人知也。」「孟子集注」尽心下「人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也。人能充無穿窬之心、而義不可勝用也。……士未可以言而言、是以言餽之也、可以言而不言、是以不言餽之也、是皆穿窬之類也。」朱子注「充、滿也。穿、穿穴。踰、踰牆、皆為盜之事也。能推所不忍、以達於所忍、則能滿其無欲害人之心、而無不仁矣。能推其所不為、以達於所為、則能滿其無穿窬之心、而無不義矣。」「餽、探取之也。今人以舌取物曰餽、即此意也。便佞隱默、皆有意探取於人、是亦穿窬之類。然其事隱微、人所易忽、故特拏以見例。明必推無穿窬之心、以達於此而悉去之、然後為能充其無穿窬之心也」、つまり、壁に穴を開けることと垣根を越えることであるが、どれも盗みを働くことであり、盗人が常に人に知られるのを恐れて「本当に盗みを働いたわけではない」と言って隠そうとする、これと同じように、内心の柔弱を隠す為に威嚴ある顔色をする(「色厲而内荏」、こういう外面と内実とが相違があることや、また、言うべきでない

ことを言つて人を喜ばしたり、言うべきことを言わず故意に人を困らせた  
りする、このようなことも「穿窬」である）の心がなければ、これが「義」  
の徳である。心が正直でなく「私意」（つまり私意・憶測。詳しくは本稿の  
第六章）があれば、これが「穿窬」の類のものである。人を害する心があ  
れば「仁」の徳を修めていないことであり、「穿窬」の心があれば「義」の  
徳を修めていないことであるが、「誠意」「正心」（『大学章句』「欲修其身者、  
先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。」  
朱子注「心者、身之所主也。誠、実也。意者、心之所發也。實其心之所發、  
欲其一於善而無自欺也。致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所  
知無不尽也。格、至也。物、猶事也。窮至事物之理、欲其極處無不到也」、  
つまり、「心」がそれぞれの事物のその「理」（つまり性質）に従つてその  
働き（つまり「意」を行うこと）は徳を修める具体的な内容であり、日々  
間断なく行われて（つまり「篤行」）はじめて徳が修められるのである、「学  
は必ず講して後に明らかなり。」（『博学、審問、慎思、明辨是講学。』『講学  
便更進其徳。』『如致知、格物は講学。』『格物須是到处求。博学之、審問之、  
慎思之、明辨之、皆格物之謂也。』『問、博学之至明辨之、是致知之事、篤  
行則力行之事否。曰、然。』『中庸章句』『博学之、審問之、慎思之、明辨之、  
篤行之。』朱子注「学、問、思、辨、所以択善而為知、学而知也」、「ここでは、  
つまり、「致知」「格物」を行つてはじめて事物の「理」が窮め尽くされる、  
ということ。「講学」はつまり、「博学」（『博学、謂天地万物之理、修己治  
人之方、皆所当学。』『亜夫問大学大意。曰、大学是修身治人底規模。』『大  
学章句』『物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、身

修而后家齊、家齊而后国治、国治而后天下平。』朱子注「物格者、物理之極  
處無不到也。知至者、吾心之所知無不尽也。知既尽、則意可得而実矣、意  
既実、則心可得而正矣。修身以上、明明徳之事也。齊家以下、新民之事也。  
物格知至、則知所止矣。意識以下、則皆得所止之序也」、つまり、自然界の  
あらゆる事物の「理」（性質）や「修己治人」（格物）、「致知」「誠意」「正  
心」「修身」「齐家」「治国」「平天下」（『明明徳於天下者、使天下之人  
皆有以明其明德也。』『明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而応  
万事者也。』『或問、明德便是仁義礼智之性否。曰、便是』、つまり、天下の  
人々にその備わっている天から稟受した「明德」（『仁義礼智』の性）を明  
らかにさせる、ということ）の方法を皆学ばなければならない、というこ  
と、「審問」（『所謂審問之、須是表裏内外無一毫之不尽、方謂之審。』『問、  
博学而篤志、切問而近思、仁在其中矣。曰、此全未是説仁處、方是尋討論  
求仁門路。』『凡事皆用審箇是非、択其是而行之。』『学者須是此心常存、方  
能審度事理、而行其所当行也。』『論語集注』子張「子夏曰、博学而篤志、  
切問而近思、仁在其中矣。』朱子注「四者皆学問思辨之事耳、未及乎力行而  
為仁也」、つまり、事物の「理」（つまり性質）を遍くほんの少し尽くさな  
いところがないように諮問する、ということ）、「慎思」（『中庸云博学之、  
審問之、方言慎思之。若未学未問、便去思他、是空劳心耳。』『中庸言慎思之。  
思之粗浅不及、固是不慎。到思之過時、亦是不慎。所以他聖人不説深思、  
不説別様思、却説箇慎思。』『又曰、中庸言慎思、何故不言深思、又不言勤思。  
蓋不可枉費心去思之、須是思其所当思者、故曰慎思也。』『人心無不思慮之理。  
若当思而思、自不当苦苦排抑、反成不静。』『慮、是思之重復詳審者。』『若

使其有心、必有思慮、つまり、思慮が緻密で深く行き過ぎず、考えるべきことを考え、無駄な心労をしてはいけない、ということ、「明辨」(「智本は明辨之理、其発便知有是非。」「仁則為慈愛之類、義則為剛断之類、礼則為謙遜、智則為明辨、信便是真箇有仁義礼智、不是假、謂之信。」「中庸所謂明辨、誠意章而今方始辨得分明。」「方未有事時、只得說敬以直内。若事物之来、当辨別一箇是非、不成只管敬去。敬、義不是兩事」、つまり、「仁義礼智」の「智」の働きであつて、事のは非を明確に弁別する、ということ)のことである。「講学」の内容としての「博学」、「審問」、「慎思」、「明辨」は即ち「致知」「格物」(『大学章句』「致知在格物。」「朱子注「致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不尽也。格、至也。物、猶事也。窮至事物之理、欲其極處無不到也」、つまり、事物の「理」(つまり性質)を窮め尽くす)のことである。「善を見て能く徙り、過ちを改むるに吝ならず。」(「蓋見義不能徙、此只是些子未合宜處、便当徙而從宜。不善不能改、則大段已是過惡底事、便当改了。此一句較重。」「問、聞義不能徙、不善不能改。先生云有輕重、其意如何。曰、義、宜也。事須要合宜。不能徙、未為不是、却不合宜。那不善底却重、須便打并了。」「聞義不能徙、不善不能改。二句雖似合掌、却有輕重淺深。聞義者、尚非有過、但不能徙義耳。至於不善、則是有過而不能改、其為害大矣。」「聞義不能徙、這一件事已是好事、但做得不合義。見那人說如此方是義、便移此之不義、以從彼之義。不善、則已是私意了。上面是過失、下面是故犯。」「問、徙義與改不善兩句、意似合掌。曰、聖人做兩項說在。試剖析令分明、徙義、是做這件事未甚合宜、或見人說、見人做得恰好、自家遷在合宜處。不善、便是全然不是、這須重新改換方得。」

『中庸章句』「義者、宜也。」朱子注「宜者、分別事理、各有所宜也」、つまり、事においてそれが適宜の状態(その事物の「理」(つまり性質)に合う状態)ではないのを見てそれを適宜の状態にさせることができ、「私意」(つまり私意・憶測)があればそれを取り除くのに躊躇わない、ということ。ここでは、「善」は即ち「義」、「徙善」は即ち「徙義」、「義」は「宜」であり、事においてそれが適宜の状態(その事物の「理」(つまり性質)に合う状態)のことを「合宜」と言う。「過」は即ち「不善」(不善、則已私意了)、つまり「私意」(つまり私意・憶測)のことであり、「改過」はつまり、「私意」を取り除くことである。(この「四者」(此四句、修徳是本。為要修徳、故去講学。下面徙義、改過、即修徳之目也。」「又問、此四句若要連續看、如何。曰、才要連續、便是說文字、不是要著實做工夫。若著實做工夫、便一句自是一句。」「説徳之不修章、曰、此自是四句。若要合説、便是徳須著修於己、講学便更進其徳。到徙義、改過、始是見之於行事、須時時要点檢。如此説、却相連續也)、つまり、「修徳」、「講学」、「改過」の四者。「修徳」が根本で、「講学」は「修徳」の為に行われるもので、「徙義」と「改過」は「修徳」の項目であり、四者はいずれも「工夫」(「仁」の徳が行いに現れるように学ぶことを励む、この努力すること)の内容である)は、「日新」(「明明徳、便要如湯之日新。」「日新是明徳事。」「徙義、則日新。」「大学章句」「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。」「朱子注「盤、沐浴之盤也。銘、名其器以自警之辭也。苟、誠也。湯以人之洗濯其心以去惡、如沐浴其身以去垢。故銘其盤、言誠能一日有以滌其旧染之汗而自新、則当因其已新者、而日日新之、又日新之、不可略有間断也」、ここでは、つまり、徳を修める

ことを日々間断なく行うこと)の要である。もしもこれらができなかったければ、「聖人猶お憂ふ。」(又曰、此は聖人自憂也。聖人固無是四者之憂、所以然者、亦自貶以教人之意。二徳之不修至是吾憂也、這雖是聖人以此教人、然學不厭之意多見於此。使有一毫自以為聖、任其自爾、則雖聖而失其聖矣、つまり、孔子は最も憂えた、ということ。聖人である孔子は固よりこの四つの憂いがなかったのだが、にもかかわらず「是れ吾が憂ひなり。」と言われたのは、自分のことを遜ることて人々を教える、という意味である。)まして学び者はなおさらである。」

尹氏曰、徳必脩而後成、學必講而後明、見善能徙、改過不吝、此四者日新之要也。苟未能之、聖人猶憂、況學者乎。

#### 第四章

子之燕居、申申如也、夭夭如也。

孔子は、用事がない暇の時は、心に「物欲」(つまり私意・憶測)の覆いがないでその体が常にゆったりして穏やかであり、(常に心を集中していることでやや厳かな表情が出るものの)顔色が和やかで朗らかであった。

集注・

「燕居」は、用事がない暇の時のことである。楊氏(前出)が言った。「申

申、其の容は舒かなり。夭夭、其の色は愉べるなり。」(叔器問、申申、夭

夭之義。曰、申申、是言其不局促、是心広体胖後、恣地申申舒泰。夭夭、好貌。觀桃之夭夭是少好之貌、則此亦是恣地。所謂色愉、只是和悦底意思。

但此只是燕居如此、在朝及接人又不然。」「心広体胖、心本是闊大底物事、

只是因愧忤了、便卑狹、被他隔礙了。只見得一辺、所以体不能常舒泰。」「問、

心広体胖。曰、無愧忤、是無物欲之蔽、所以能廣大。指前面灯云、且如此灯、

後面被一片物遮了、便不見一半了。更從此一辺用物遮了、便全不見此屋了、

如何得广大。」「大学章句」「富潤屋、徳潤身、心広体胖、故君子必誠其意。」

朱子注「胖、安舒也。言富則能潤屋矣、徳則能潤身矣、故心無愧忤、則広

大寛平、而体常舒泰、徳之潤身者然也。蓋善之実於中而形於外者如此、故

又言此以結之。」「孟子集注」尽心上「仰不愧於天、俯不忤於人、二樂也。」

朱子注「程子曰、人能克己、則仰不愧、俯不忤、心広体胖、其楽可知、有

息則餒矣、つまり、「申申」とは、心に「物欲」(つまり私意・憶測。詳しく

くは本稿の第六章)の覆い(「愧忤」)がなくてその体が常にゆったりして

穏やか(「安舒」「舒泰」)である、ということであり、「夭夭」とは、「色」(「論

語集注」季氏「色思温。朱子注「色、見於面者。」「論語集注」郷党「色斯

拳矣、翔而後集。朱子注「言鳥見人之顔色不善、則飛去、回翔審視而後下

止。」「ここでは、「顔色」つまり、顔に現れている表情)が和やかで朗らか

(「和悦」)である、ということ。程子(前出)が言った。「これは孔子の容

貌をうまく形容したものであり、「申申」の語では形容し尽くせない為に、

そこで更に「夭夭」の語を加えたのだ。現在の人は、用事がない暇な時は、「怠

惰放肆ならざれば、必ずただ嚴厲なり。」(問、申申、夭夭、聖人得於天

自然。若学者有心要收束、則入於嚴厲。有心要舒泰、則入於放肆。惟理義以養其氣、養之久、則自然到此否。曰、亦須稍嚴肅、則可。不然、則無下手處。又曰、但得身心收斂、則自然和樂。又曰、不是別有一箇和樂。才整肅、則自和樂。」「思慮不放肆、便是持志。動作不放肆、便是守氣。守氣是無暴其氣、只是不放肆。」「若不恭敬、便成放肆。如此類不難知、人却放肆不恭敬。如一箇大公至正之路甚分明、不肯行、却尋得一線路與自家私道合、便稱是道理。今人每每如此。」「自棄、是自放棄底。」「自棄是全不做。」『孟子集注』離婁上「吾身不能居仁由義、謂之自棄也。」朱子注「自棄其身者、猶知仁義之為美、但弱於怠惰、自謂必不能行、與之有為必不能勉也」、ここでは、「怠惰」とは自ら「仁義」の徳の実行を行おうとしないことであり、「放肆」とは、一般に心を集中していない状態のことであるが、行いの従うところが私意だのに、道理だと言う、このようなことも「放肆」とされる。「怠惰放肆」でなければ、必ず顔つきが「太だ嚴厲」(其心即在此、便惺惺。未有外面整齊嚴肅、而内不惺惺者。如人一時問外面整齊嚴肅、便一時惺惺。一時放寬了、便昏怠也。」「或云、主一之謂敬。敬莫只是主一。曰、主一又是敬字注解。要之、事無小無大、常令自家精神思慮尽在此。遇事時如此、無事時也如此。」「問、敬事而信、疑此敬是小心畏謹之謂、非主一無適之謂。曰、遇事臨深履薄而為之、不敢輕、不敢慢、乃是主一無適。』『論語集注』述而「子温而厲、威而不猛、恭而安。」朱子注「厲、嚴肅也。人之德性本無不備、而氣質所賦、鮮有不偏、惟聖人全体渾然、陰陽合徳、故其中和之氣見於容貌之間者如此。門人熟察而詳記之、亦可見其用心之密矣」、ここでは、つまり、あまりにも厳し過ぎる、ということ。朱子にあつては、「嚴厲」は、「嚴肅」

「整肅」「整齊嚴肅」のことであり、孔子は用事がない時にも常に心を集中していることでやや厳かな表情をしている、という意味である。「嚴厲」の時もこの「四字」(つまり、「申申」「天天」)で形容できないし、「怠惰放肆」の時もまたこの四字で形容できないのである。ただ聖人(つまり孔子)だけには自ずと「中和の氣」(「有和氣者、必有愉色。」「然惟義能使事物各得其宜、不相妨害、自無乖戾、而各得其分之和、所以為義之和也。」「喜怒哀樂未發、無所偏倚、此之謂中。中、性也。」「喜怒哀樂之發、無所乖戾、此之謂和。和、情也。」「仁屬春、屬木。且看春間天地發生、藹然和氣、如草木萌芽、初間僅一針許、少間漸漸生長、以至枝葉花実、變化万状、便可見他生生之意。非仁愛、何以如此。緣他本原處有箇仁愛温和之理如此、所以發之於用、自然慈祥惻隱。』『中庸章句』「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉。」朱子注「喜、怒、哀、樂、情也。其未發、則性也。無所偏倚、故謂之中。發皆中節、情之正也、無所乖戾、故謂之和。」「致、推而極之也。位者、安其所也。育者、遂其生也。自戒懼而約之、以至於至靜之中、無少偏倚、而其守不失、則極其中而天地位矣。自謹獨而精之、以至於応物之處、無少差謬、而無適不然、則極其和而萬物育矣。蓋天地万物本吾一体、吾之心正、則天地之心亦正矣、吾之氣順、則天地之氣亦順矣。故其效驗至於如此。此學問之極功、聖人之能事、初非有待於外、而修道之教亦在其中矣。是其一体一用雖有動靜之殊、然必其体立而後用有以行、則其美亦非有兩事也」、ここでは、「中」とは「無所偏倚」「無少偏倚」、つまり偏るところがないということであり、「和」とは「無所乖戾」「無少差謬」、

つまり相抵触するところがなく少しの誤りもないということである。つまり、偏るところのない氣を稟受している、これが「性」の状態の「氣」であるが、その「氣」が動いている時は相抵触するところがなく少しの誤りもない、これが「情」の状態の「氣」である）が備わっているのである。」

燕居、閒暇無事之時。楊氏曰、申申、其容舒也。天天、其色愉也。○程子曰、此弟子善形容聖人處也、為申申字說不盡、故更著天天字。今人燕居之時、不怠惰放肆、必太嚴厲。嚴厲時著此四字不得、怠惰放肆時亦著此四字不得、惟聖人便自有中和之氣。

## 第五章

子曰、甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公。

孔子が言われた。「甚だしいことだよ、私が「周公の道」を行い得ないことによりもう行おうと思うこともなくなった。久しいことだよ、私がまた夢に周公を見ることもなくなった。」

集注

「復」は、「扶」「又」の反。孔子が「盛時」（蜚卿問、孔子夢周公、若以聖人欲行其道而夢之耶、則是心猶有所動。若以壯年道有可行之理而夢之耶、則又不必虛有此兆朕也。曰、聖人曷嘗無夢、但夢得定耳。須看它與周公契合如何。不然、又不見別夢一箇人也。聖人之心、自有箇動懇惻但不能自

已処、自有箇脫然無所繫累処、要亦正是以此卜吾之盛衰也」、つまり壯年の時）に、「周公の道」（魯則修廢墜而已、便可復周公之道。」『論語集注』雍也「子曰、齊一變、至於魯。魯一變、至於道。」朱子注「魯則重礼教、崇信義、猶有先王之遺風焉。但人亡政息、不能無廢墜爾。道、則先王之道也」、つまり、「先王の道」（つまり、「王道」、「仁政」のことである。即ち、民心

を得ることを根本とする政治政策を「人に忍びざるの心」（つまり、「仁」であり、慈愛の心のことであるが、「惻隱之心」（つまり深く悲しんで痛む心）でもあり、即ち、子供が井戸に落ちそうでその命が危うくなるのを見て心が深く悲しみ痛んで思わず救いたいこのような気持ち）で行う、ということ。詳しくは本稿の第一章）を行おうと志したのである。「故に夢寐の間、之を見ること或るが如し。」（「孔子固不応常常夢見周公。然亦必曾夢見来、故如此說。然其所以如此說之意、却是設詞。」問、此章曰、孔子未衰以前、常常夢見周公矣。伊川却言不會夢見、何也。曰、聖人不応日間思量底事、夜間便夢見。如高宗夢傳說、却是分明有箇傳說在那裏、高宗不知。所以夢見、亦是朕兆先見者如此。孔子夢奠兩楹事、豈是思慮後方夢見。此說甚精微。但於此一章上說不行、今且得從程子說。」問、夢周公、是真夢否。曰、当初思欲行周公之道時、必亦是曾夢見。曰、恐涉於心動否。曰、心本是箇動物、怎教它不動。夜之夢、猶寤之思也。思亦是心之動処、但無邪思、可矣。夢得其正、何害。心存這事、便夢這事。常人便胡夢了。」問、孔子夢周公、却是思。曰、程先生如此說、意欲說孔子不真見周公。然見何害」、つまり、それゆえに、夢の中で、周公を見たことがあるようである、ということ。程伊川は「夢の中で周公を見たことがない」と言ったのだが、これに対して、

朱子は「きつと見たことがあるから、このようにおっしゃったのだ」と説明している。孔子が年老いて「周公の道」を行えないことになってからは、「則ち復た是の心無くして、亦た復た是の夢無し。故に此に因りて自ら其の衰えの甚しきを歎ずるなり。」（「據文勢時、甚矣、吾衰也、是一句。久矣、吾不復夢見周公、是一句。惟其久不夢見、所以見得是衰。若只是初不夢見時也未見得衰處。此也無大義理、但文勢當是如此。」）「孔子自言老矣、以周公之道不可得行、思慮亦不到此、故不復夢。甚歎其衰如此。」「吾不復夢見周公、自是箇徵兆如此。當聖人志慮未衰、天意難定、八分猶有兩分運轉、故他做得周公事、遂夢見之、非以思慮也。要之、精神血氣與時運相為流通」、つまり、再び「周公の道」を行おうと思うことがなくて、また再びこの夢を見ることもなかったから、そこで自ら自分の衰えが甚だしいことを嘆いた、という。朱子は「孔子は年老いたことで衰えた」と嘆かれたのではなく、「周公の道」を行いたいことによりもう行おうと思わないが故に、周公の夢を見ることもなくなった、これで孔子が自ら「甚だしきかな、吾の衰へたるや。」と嘆かれた。」と説明している。程子が言った。「孔子が壮年の時、「寤寐に常に周公の道を行わんことを存す。」（「問、伊川以為不是夢見人、只是夢寐常存行周公之道耳。集注則以為如或見之。不知果是如何。曰、想是有時而夢見。既分明說夢見周公、全道不見、恐亦未安。又問、夫子未嘗識周公、夢中烏得而見之。曰、今有人夢見平生所不相識之人、却云是某人某人者、蓋有之。夫子之夢、固與常人不同、然亦有是理耳」、つまり、寝ても覚めても常に「周公の道」を行おうと思っていた、ということ。程子は、周公を夢の中で見たこのことではなく、寝ている間にも「周公の道」を実

現しようと思っていたこのことだ、と解釈した。これに対して、朱子は、「夢に周公を見る。」と孔子がはっきりおっしゃっているのだから、周公を見ていないと言いつけるのも、恐らく落ち着きが悪いかもしれない、と説明している。其の老ゆるに及びてや、則ち志慮衰へて以て為すこと有る可からず。（「問、甚矣吾衰也。曰、不是孔子衰、是時世衰。又曰、與天地相應。若天要用孔子、必不教他衰。如太公武王皆八九十歲。夫子七十余、想見纍垂。」）「道夫問、設當孔子晚年、時君有能用之、則何如。曰、便是不衰、如孔子請討陳恒時、已年七十一、到此也做得箇甚」、つまり、孔子が年老いてからは、その「志慮衰へて」（「思慮亦不到此」、つまり、「周公の道」を行おうと思うことができなくなって）「周公の道」を実現しようとする行動を起こすことができない、ということ。朱子は、「甚だしきかな、吾の衰へたるや。」の「衰え」は、孔子が年老いたことで衰えたこのことではなく、これは「時世」（つまり当時の世の中）が衰えたという意味だ、と説明している。思うに、「道」を行おうと思うのが「心」であって、老年も少年も同じで異なることはないのだが、しかし「道」を実行するのが体であって、年老いれば衰えるのだ。

復、扶又反。○孔子盛時、志欲行周公之道、故夢寐之間、如或見之。至其老而不能行也、則無復是心、而亦無復是夢矣、故因此而自歎其衰之甚也。○程子曰、孔子盛時、寤寐常存行周公之道。及其老也、則志慮衰而不可以有為矣。蓋存道者心、無老少之異、而行道者身、老則衰也。

## 第六章

子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝。

〔道に志す〕とは、心に為すべき「理」(つまり事物の性質)が存して行いが常にその「理」に従うということであり、具体的には、「格物」「致知」(つまり、事物の「理」(つまり性質)を窮め尽くすこと)「正心」「誠意」(つまり、「心」がそれぞれの事物のその「理」(つまり性質)に従ってその働き(つまり「意」を行うこと)を行うこと)である。「徳に拠る」とは、例えば、親に仕える時には「孝」に基づき、君に仕える時には「忠」に基づく、このように、事に当たるときにはその事に応じての「徳」に基づいてその事に当たり、これでその「徳」を守る、ということである。「仁に依る」とは、「理」(つまり事物の性質)が常に心に存して、日常生活において「私欲」「物欲」「私意」、即ち私意・憶測)を悉く取り除いて、行いが常に「仁」に違わない(つまり「理」に背かない)、ということである。「芸に遊ぶ」とは、「芸」は「六芸」、つまり、「礼」(礼制度)、「楽」(音楽)、「射」(弓術)、「御」(馬車の御し方)、「書」(文字の仕組みやそのそれぞれの部首の含意など)、「数」(算法)のことであり、「遊ぶ」とはここでは、つまり、学びにおいてただ多くの書物を読誦し暗記することを才能とするのではなく文章の含意を落ち着いてゆっくり吟味理解し「情」(つまり「性」)に従う、ということである。孔子が言われた。「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ。」

集注：

「志とは、心の之く所の謂ひなり。道は、則ち人倫日用の間当に行ふべき所の者はれなり。」(「心有所之謂之志、志学、則其心專一向這箇道理上去。」「志者、言心之念只在此上、步步恁地做、為之不厭。」「問、志於道。曰、思量講究、持守踐履、皆是志。念念不舍、即是綫說、須是有許多實事。」「吉甫說志於道。曰、志於道、不是只守箇空底見解。須是至誠懇惻、念念不忘。所謂道者、只是日用当然之理。事親必要孝、事君必要忠、以至事兄而弟、與朋友交而信、皆是道也。志於道者、正是謂志於此也。」「志於道、如講学力行、皆是。」「道理也是一箇有條理底物事、不是箇圖一物、如老莊所謂恍惚者。志於道、只是存心於所當為之理、而求至於所當為之地、非是欲將此心繫在一物之上也。」「道者、人之所共由、如臣之忠、子之孝、只是統拳理而言。」「道、是日用常行合做底。」「致知、格物、便是志於道」、つまり、「志」とは、心の向かうところのことであり、即ち、あることに専念してそれをぶれずに実行して飽きないということである。「道」とは、人々の共通の由るところのものであるが、即ち、日常生活において使われている「理」(「道理」(ここでは、忠、孝などの人倫や為すべきこと)のことであり、日常生活において常に「理」(つまり事物の性質)に合うことを行うことである。「道に志す」は、心に為すべき「理」が存して行いが常にその「理」に従うということであるが、即ち、「講学」(「博学、審問、慎思、明辨是講学。」「如致知、格物是講学」、つまり、「博学」、「審問」、「慎思」、「明辨」が「講学」の内容であるが、即ち、「致知」「格物」(つまり、事物の「理」(性質)を窮め尽くす)のこと)と「力行」(「然学問、慎思、明辨、力行、皆不可闕一。」



「論先後、当以致知為先。論輕重、当以力行為重。」始條理是致知、終條理是力行。如中庸說博學、審問、慎思、明辨、與大學物格、知至、這是始條理。如篤行與誠意、正心、修身以下、這是終條理」、つまり、「誠意」「正心」（つまり「心」がそれぞれの事物のその「理」（つまり性質）に従ってその働き（つまり「意」）を行うこと）以下（つまり「修身」「齊家」「治國」「平天下」のこと）である（「致知」「格物」と「正心」「誠意」について詳しくは本稿の第三章）。これを知って心が必ず（「道」に）向かうのである。「則ち適く所の者は正しくして」（又曰、道不可須臾離、可離非道也。所謂不可離者、謂道也。若便以日用之間舉止動作便是道、則無所適而非道、無時而非道、然則君子何用恐懼戒慎、何用更學道為、為其不可離、所以須是依道而行。如人說話、不成便以說話者為道、須是有箇仁義禮智始得、つまり、だとすれば、日常生活での言動が「道」（「理」）に合わないものではなく、「道」から外れる心配がないのだ。

「拠とは、執り守るの意。徳とは、得るなり、其の道を心に得て失はざるの謂ひなり。」（問、拠於徳云云。曰、徳者、吾之所自有、非自外而得也。以仁義禮智觀之、可見。」問、拠於徳。曰、如孝、便是自家元得這孝道理、非從外旋取來。拠於徳、乃是得這基址在這裏。」「拠於徳。徳者、得之於身。然既得之、守不定、亦会失了。須常照管、不要失了。須是拠守、方得。」「拠於徳、謂忠於君則得此忠、孝於親則得此孝、是我之得於己者也、故可拠。」「事父母則為孝徳、事兄長則為悌徳。徳是有得於心、是未事親從兄時、已渾全是孝弟之心。此之謂徳。」「徳只是做這一件事底意思、拠而勿失。」「徳是道之実。」「徳是逐件上理會底。」「拠徳、是因事發見底。如因事父有孝、由事

君有忠。」「拠於徳。徳、謂得之於心、有這箇物事了、不待臨時旋討得來。且如仁義禮智有在這裏、不待臨時旋討得來。又曰、徳是自家有所得處在這裏。且如事親孝、則孝之理得。事兄弟、則弟之理得。所謂在這裏、但得有淺深。」「徳、是自家心下得這箇道理、如欲為忠而得其所以忠、如欲為孝而得其所以孝、つまり、「徳」とは、得ることであり、生まれながら心に備わっている「道理」（「仁義禮智」）のことであるが、「仁義禮智」をはじめ「孝」「忠」「悌」なども皆心に備わっている「徳」である。「徳に拠る」とは、例えば、親に仕える時には「孝」に基づき、君に仕える時には「忠」に基づく、このように、事に当たる際にはその事に応じての「徳」に基づいてその事に当たり、これでその「徳」を守る、ということである。）心に備わっている「徳」を守って失わなければ、「則ち終始惟一にして、日新の功有り。」（「惟一是終始不變。」「惟一是要守得不離。」「惟一者、有首有尾、專一也。」「明明徳、便要如湯之日新。」「尚書」咸有一徳「終始惟一、時乃日新。」「大学章句」「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。」朱子注「盤、沐浴之盤也。銘、名其器以自警之辭也。苟、誠也。湯以人之洗濯其心以去惡、如沐浴其身以去垢。故銘其盤、言誠能一日有以滌其旧染之汙而自新、則當因其已新者、而日日新之、又日新之、不可略有間斷也」、つまり、終始一貫して「徳」を離れず、日々間斷なく「徳」を修めるこの効果が現れる、ということ。「惟一」はつまり、終始変化しないこと、終始專一のことである。「日新」はつまり、徳を修めることを日々間斷なく行うことである。）

「依とは、違はざるの謂ひなり。仁は、則ち私欲尽く去りて心の徳の全きなり。」（依仁、則又所行処每事不違於仁。」「依於仁、仁是衆善總会処。」「仁、

謂有箇安頓處。「依仁、則是平日存主處、無一念不在這裏、又是拠於德底骨子。」「依仁、則是此理常存於心、日用之間常常存在。」「仁是全体、徳只是一事之徳否。曰、然。」「仁是徳之心。」「仁是全体大用、当依靠處。」「依仁、是本体不可須臾離底。」「依仁、如鼻之呼吸氣。」「依仁、則是此理常存於心、日用之間常常存在」、つまり、「理」(つまり事物の性質)が常に心に存していて、日常生活において「私欲」(「私意」、即ち私意・憶測。詳しくは後述)を悉く取り除き、行いが常に「仁」に違わない(つまり「理」に背かない)、ということ。」「功夫」(「工夫」、つまり、「仁」の徳の実行を行うように学ぶことを励むこの努力のこと)がここまで進んで「食を終ふるの違ひ」(「仁者、人之本心也。依、如依乎中庸之依、相依而不捨之意。既有所拠守、又当依於仁而不違、如所謂君子無終食之間違仁是也。」「論語集注」里仁「君子無終食之間違仁。」「朱子注「終食者、一飯之頃」、つまり、食事を取る間にも「仁」に違ふこと)がなければ、「存養」(「問、誠意、正心二段、只是存養否。曰、然。」「孟子集注」尽心上「存其心、養其性、所以事天也。」「朱子注「存、謂操而不捨。養、謂順而不害」、つまり、「存養」は本来、「存其心、養其性」のことであるが、ここでは、「正心」「誠意」の意であり、即ち、「心」がそれぞれの事物のその「理」(つまり性質)に従ってその働き(つまり「意」を行うこと)が円熟し、遍く行き渡って「天理の流行」(「四時行、百物生、莫非天理発見流行之実、不待言而可見。」「心之全体湛然虚明、万理具足、無一毫私欲之間、其流行該遍、貫乎動靜、而妙用又無不在焉。故以其未発而全体者言之、則性也。以其已発而妙用者言之、則情也。」「論語集注」顔淵「子曰、非礼勿視、非礼勿聽、非礼勿言、非礼勿動。」「朱子注「非礼者、

己之私也。勿者、禁止之辭。是人心之所以為主、而勝私復礼之機也。私勝(勝私?)、則動容周旋無不中礼、而日用之間、莫非天理之流行矣」、つまり、四季の巡り替わりや万物の生成がどれも「天理」(「理」、つまり事物の性質)に従って行われているということであるが、ここでは、即ち、立ち居振る舞いや言動などがほんの少しの「私欲」(「私意」、つまり、私意・憶測。詳しくは後述)もなくどれも「理」に従って行われるということ)でないものはないのである。

「游とは、物を遊び情に適ふの謂ひなり。」「(明道以上蔡記誦為玩物喪志、蓋為其意不是理会道理、只是誇多門靡為能。」「或問、游者、玩物適情之謂。玩物適情、安得為善。曰、游於芸一句是三字、公却只說得一字。」「游者、從容潜玩之意、又当在後。」「游於芸、蓋上三句是箇主腦、芸却是零碎底物事。做那箇、又来做這箇、是游来游去之謂也。然亦不可游從別處去、須是游於芸方得」、ここでは、「遊ぶ」とはつまり、学びにおいてただ多くの書物を読誦し暗記することを才能とするのではなく文章の含意を落ち着いてゆっくり吟味理解し「情」(「情者、性之動也。人之情、本但可以為善而不可以為惡、則性之本善可知矣。」「孟子集注」公孫丑章句上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。」「朱子注「惻隱、羞惡、辭讓、是非、情也。仁、義、礼、智、性也。心、統性情者也。端、緒也。因其情之発、而性之本然可得而見、猶有物在中而緒見於外也」、ここでは、つまり「性」に従う、ということ。また、「六芸」の「礼、楽、射、御、書、数」の六科目において一つの科目を学び終えてそれからもう一つの科目を学ぶこの学び方で学ぶのではなく、この科目を学んだりあの科目を学

んだりして幾つかの科目の間で行ったり来たりすること、これも「遊ぶ」である。「芸は、則ち礼楽の文、射、御、書、数の法」(問、小学礼楽射御書数之文、是芸否。曰、此雖小学、至依於仁既熟後、所謂小学者、至此方得他用。」「人生八歳、則自王公以下、至於庶人之子弟、皆入小学、而教之以灑掃、應對、進退之節、礼楽、射御、書数之文。」「三代之礼、孔子皆嘗学之而能言其意。但夏礼既不可考証、殷礼雖存、又非当世之法、惟周礼乃時王之制、今日所用。孔子既不得位、則從周而已。」「礼楽之楽、音岳。」「叔器因言、礼楽射御書数、自秦漢以來皆廢了。曰、射、如今秀才自是不曉。御、是而今無車。書、古人皆理會得、如偏旁義理皆曉、這也是一事。数、是算数、而今人皆不理會。六者皆實用、無一可缺。而今人是從頭到尾、皆無用、つまり、「芸」とはつまり、「六芸」(「礼」(礼制度)、「楽」(音楽)、「射」(弓術)、「御」(馬車の御し方)、「書」(文字の仕組みやそのそれぞれの部首の含意など)、「数」(算法)のことである。古代では、八歳に「小学」に入學して「六芸」を学ぶのであった)、どれも「至理」(ここでは、つまり「仁」)に従って行われて、日常生活において必要不可欠なものである。一日中に「遊んで」、その「義理」(「徳、謂義理之得於己者。」「徳者、得也、得其道於心而不失之謂也。」「道者、日用事物当行之理、皆性之徳而具於心、無物不有、無時不然、所以不可須臾離也。」「礼、謂義理之節文。」「礼、即理之節文也。」「礼者、天理之節文、人事之儀則也」、つまり、「義理」は一般に「理」「天理」「道」「性」と同義、「物として有らざること無し」のものだから、即ち、あらゆる物の性質のことである)の「趣」(「蓋某僻性、讀書須先理會得這樣分曉了、方去涵泳它義理。後來読得熟後、方見得是子思參取夫子之説、著為此書。

自是沉潜反覆、逐漸得其旨趣、定得今章句一篇。」「又云、某少時為学。十六歳便好理学、十七歳便有如今学者見識。後得謝顯道論語、甚喜、乃熟読。先将朱筆抹出語意好处。又熟読得趣、覺見朱抹太煩、再用墨抹出。又熟読得趣、別用青筆抹出。又熟読得其要領、乃用黃筆抹出」、つまり、「旨趣」と同義、即ち、主旨)を広く知れば、「心務」(問、心務不煩、是如何。曰、閑時不會理會得、臨時旋理會、則煩。若豫先理會得、則臨時事來、便從自家理會得處理會將去。如理會得礼、則礼到面前便理會得。如理會得楽、則楽到面前便理會得、更不煩也」、つまり、事に当たるときには余裕があつて、「心も亦た放たれる所無し。」「(到孟子又却説求放心、存心養性。大学則又有所謂格物、致知、正心、誠意。至程先生又專一發明一箇敬字。若只恁看、似乎參錯不齊、千頭万緒、其实际只一理。」「所謂求放心、只常存此心便是。」「曰、如何是收其放心、養其徳性。曰、放心者、或心起邪思、意有妄念、耳聽邪言、目觀乱色、口談不道之言、至於手足動之不以礼、皆是放也。收者、便於邪思妄念処截斷不統、至於耳目言動皆然、此乃謂之收。既能收其放心、徳性自然養得。不是收放心之外、又養箇徳性也。」「收放心、只是收物欲之心。如理義之心、即良心、切不可須收。」「曰、然。如洒掃應對、博学、審問、慎思、明辨、皆所以求放心。」「孟子集注』告子章句上「学問之道無他、求其放心而已矣。」「朱子注「学問之事、固非一端、然其道則在於求其放心而已。」「孟子集注』尽心章句上「存其心、養其性、所以事天也。」「朱子注「養、謂順而不害。∴愚謂尽心知性而知天、所以造其理也。存心養性以事天、所以履其事也。不知其理、固不能履其事。然徒造其理而不履其事、則亦無以有諸己矣」、つまり、心にもまた「物欲」(「又曰、有人生下來便自少物欲者、看

来私欲は氣質中一事。「人本有此理、但為氣稟物欲所蔽。若不格物、致知、事至物来、七顛八倒。」「格物、致知、正心、誠意、不可著纖毫私意在其中。」「意未誠、則全体是私意、更理會甚正心。」「看文字先有意見、恐只是私意。」「如有得九分義理、雜了一分私意、九分好善、惡惡、一分不好、不惡、便是自欺。…。人須是掃去氣稟私欲、使胸次虛靈洞徹。」「將天下正大底道理去処置事、便公。以自家私意去処之、便私。」「多是要求濟事、而不知自身已不立、事決不能成。人自心若一毫私意未盡、皆足以敗事。」「意、私意之発。必、在事先。固、在事後。我、私意成就。四者相因如循環。」『論語集注』子罕「子絶四、毋意、毋必、毋固、毋我。」朱子注「意、私意也。…。蓋意必常在事前、固我常在事後、至於我又生意、則物欲牽引、循環不窮矣」、つまり、「私意」「私意」(つまり、私意・憶測)が生じることではない、ということ。朱子にあっては、事を処置するにおいて、もしほんの少しの「私意」(つまり私意・憶測)があれば、きつと成功することができない、とされている。「放心」とは、心に「物欲」(「私意」「私欲」、つまり、私意・憶測)が生じることである。「求放心」と「收放心」は同義、即ち「物欲」(つまり私意・憶測)を取り除くことであり、これが「其の徳性を養ふ」ことでもある。「格物」「致知」「誠意」「正心」が「求放心」「收放心」の具体的な行為になるのである。この章は、人々の学ぶことをするのはこのようにすべきであることを言っているのである。思うに、学ぶことにおいては何よりもまず「志」を立てることであり、「道」に志せば、「則ち心正しきに存して他ならず。」(つまり、心に為すべき「道」(「理」)が存して行いが常にその「理」に従っておれない。)[徳]に拠れば、「則ち道を心に得て失はず。」(つまり、「道」(「理」)が心に存し

て「物欲」(つまり私意・憶測)に覆われることはない。)[仁]に依れば、「則ち徳性常に用ひられて物欲行はれず。」(つまり、「徳」(「性」「理」)が常に行いに現れて「物欲」(つまり私意・憶測)が生じることはない。)[芸]に遊べば、「則ち小物遺さずして動息養ふこと有り。」(つまり、「小物」(「礼、楽、射、御、書、数」の「六芸」)を悉く学んで「動息養ふこと有り」(「動息」は「動静」のこと、「動息養ふこと有り」は「其の徳性を養ふ」)のことであり、即ち、「物欲」(つまり私意・憶測)が取り除かれる。)[学]ぶ者はここにおいて、「以て其の先後の序、軽重の倫を失はざること有れば」(「志於道、志之一字、不徒是知、已是心中放它不下。拠於徳、是行道而得之於己。然此都且就事上説。至依於仁、則無物欲之累、而純乎天理、道至此亦活、徳至此亦活、却亦須游於芸。」「拠徳、依仁、雖有等級、不比志道與拠徳、依仁、全是兩截。志只是心之所之、與有所拠、有所依不同也。」「又曰、志於道、拠於徳、説得尚粗。到依於仁、方是工夫細密。游於芸者、乃是做到這裏、又當養之以小物。」「拠於徳、有時也會失了。必依於仁、此心常存、則照管得到、能守是徳矣。游於芸、似若無緊切底事、然能如此、則是工夫大故做得到了、所謂庸言之信、庸行之謹也」、つまり、その先後の順序、精粗の等級を失わないのであれば、ということ。学びは「志道↓拠徳↓依仁↓游芸」という順序で行われるものであるが、その中では、「志道」と「拠徳」は共に事において言うものの、「志道」と「拠徳」「依仁」の間では「工夫」において全く違うものであり、更に「拠徳」と「依仁」の間には等級の差があり、「志道」「拠徳」はまだ説くのが粗いもので、「依仁」は「工夫」が最も細密でここに至れば「物欲」(つまり私意・憶測)がなくて「徳」が守ら

れるのであり、そして「游芸」をも「工夫」として行わなければならないのである。「則ち本末兼該し、内外交養ひて」（子升問、上三句皆有次序、至於芸、乃日用常行、莫不可後否。曰、芸は小学工夫。若説先後、則芸為先、而三者為後。若説本末、則三者為本、而芸其末、固不可徇末而忘本。習芸之功固在先。游者、從容潛玩之意、又当在後。文中子説、聖人志道、摠徳、依仁、而後芸可游也。此説得自好。」「自志於道至依於仁、是從粗入精、自依於仁至游於芸、是自本兼末。能依於仁、則其游於芸也、蓋無一物之非仁矣。」「志於道、是君臣父子夫婦兄弟朋友之道。明得此理、得之於身、斯謂摠於徳。然而不依於仁、則二者皆為無用矣。依仁不止於發見。凡内外隱顯、莫非仁也。」「古人於礼楽射御書數等事、皆至理之所寓。游乎此、則心無所放、而日用之間本未具舉、而内外交相養矣」、つまり、「志道」↓「摠徳」↓「依仁」が「粗」から「精」に入る過程であるが、「志道」「摠徳」「依仁」の三者が「本」、「游芸」は「末」、「志道」「摠徳」「依仁」、それから「游芸」、この四者を行って「本」と「末」の両方を兼ね、「依仁」であれば、日常に行われている「游芸」がすべて「仁」の現れであって「仁」でないものはなく、「内」（つまり「隠」と「外」（つまり「顯」）を共に「養ひて」（つまり、「物欲」（つまり私意・憶測）が取り除かれて行為が「性」に従って行われて、日常生活では、「少しの間隙無くして」（心無所放）、つまり、少しの間でも「物欲」（つまり私意・憶測）を生ずることがなくて、「涵泳從容として」（曰、某為見此人読書大段函養、所以説讀書須当涵泳、只要子細看玩尋繹、令胸中有所得爾。」「所謂涵泳者、只是子細讀書之異名也。」「不以一毫私意自蔽、不以一毫私欲自累、涵泳乎其所以知。」「曰、從容、謂徐徐。」「周舜功問、

從容不迫、如何謂之和。曰、只是説行得自然如此、無那牽強底意思、便是從容不迫。」「論語集注」而学「有子曰、礼之用、和為貴。」朱子注「和者、從容不迫之意」、つまり、読書において子細に精読吟味し、ゆっくりと自然に行っていて牽強することはなく、いつの間にか自ら知らないうちに「聖賢」（問、賢者必智、何為却有淺深。天道必在聖人、何為却有厚薄。曰、聖賢固有等差。如湯武之於堯舜、武王之於文王、便自可見。」「以至聖人之所以為聖、賢人之所以為賢、皆只是這一箇道理。」「循理而公於天下者、聖賢之所以尽其性也。」「聖賢至公無我之心、於此可見。」「取必於智謀之末而不循天理之正者、非聖賢之道也」、つまり、「聖人」「賢人」のこと。「聖人」が「賢人」より上位に位置付けられるのであるが、心に「私」「我」（私欲「物欲」、つまり私意・憶測）がなく行為がすべて「天理」「理」（つまり事物の性質）に従って行われる（つまり「公」）、この点においては両者が同じである）の境地に達するのである。

志者、心之所之之謂。道、則人倫日用之間所當行者是也。知此而心必之焉。則所適者止、而無他歧之惑矣。

據者、執守之意。徳者、得也、得其道於心而不失之謂也。得之於心而守之不失、則終始惟一、而有日新之功矣。

依者、不違之謂。仁、則私欲盡去而心徳之全也。功夫至此而無終食之違、則存養之熟、無適而非天理之流行矣。

游者、玩物適情之謂。藝、則禮樂之文、射、御、書、數之法、皆至理所寓、而日用之不可闕者也。朝夕游焉、以博其義理之趣、則應務有餘、而心亦無

所放矣。○此章言人之為學當如是也。蓋學莫先於立志、志道、則心存於正而不他。據德、則道得於心而不失。依仁、則德性常用而物欲不行。游藝、則小物不遺而動息有養。學者於此、有以不失其先後之序、輕重之倫焉、則本末兼該、内外交養、日用之間、無少間隙、而涵泳從容、忽不自知其入於聖賢之域矣。

## 第七章

子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。

(古代では、面会の場合、必ず面会の相手に敬意を表す為に自分の身分に応じての贈物を持っていくのが礼儀である。例えば、卿は「羔」、大夫は「雁」、士は「雉」、など。「束脩」とは、一束の干し肉(つまり、十本の長く伸ばした干し肉を一束にしたもの)のことであり、手土産の中では最も値段の安いものである。)孔子が言われた。「自分から「束脩」より以上の礼を行った場合(つまり、最も安値の「束脩」でもいいし、「束脩」より高価な贈物でもいいが、自分からそれを持って教えを請いに来た場合)、私は教えないことはしなかった。」

集注・

「脩」は、「脯」(『詩経集伝』王風・中谷有雉「中谷有雉、暎其脩矣。」朱子注「脩、長也。或曰、乾也。如脯之謂脩也。」「論語注疏」郷党「沽酒市脯不食。」邢昺疏「酒不自作、未必精潔。脯不自作、不知何物之肉、故不食

『論語集注』(朱熹撰)の日本語訳(述而第七上篇)

孫 路易

也。」「論語集注」郷党「沽酒市脯不食。」朱子注「恐不精潔、或傷人也」、つまり、干し肉のこと)である。「十脰を束と為す。」「春秋公羊伝」昭公二十五年伝「與四脰脯。」何休注「屈曰脰、申曰脰」、つまり、長く伸ばした干し肉の十本を一束にする、ということ。)古代では、面会の場合、必ず「贄を執る」(『礼記』曲礼下「凡贄、天子鬯、諸侯圭、卿羔、大夫雁、士雉、庶人之摯匹、童子委摯而退。野外軍中無摯、以纓、拾、矢、可也。婦人之摯、根柢、脯脩、棗栗。」、つまり、相手に敬意を表す為に自分に身分に応じての贈物を持っていくこと)が礼儀であり、「束脩は其の至りて薄き者なり。」「古人空手硬不相見。束脩是至不直錢底、羔雁是較直錢底。真宗時、講筵説至此、云、聖人教人也要錢」、つまり、一束の干し肉は、最も値段の安い手土産である、ということ。)思うに、「人の生有るに、同じく此の理を具ふ。」「(孟子集注)告子「聖人與我同類者。」朱子注「聖人亦人耳、其性之善、無不同也」、つまり、人が生まれれば、同じくこの「理」を備える、ということ。ここでは、即ち、聖人も人もその「性」は「善」である、ということである。)それ故に、聖人の人々に対して、「其の善に入るを欲せざること無し。」「(至善、則事理当然之極也。」「不明乎善、謂未能察於人心天命之本然、而真知至善之所在也。」「良心者、本然之善心、即所謂仁義之心也。」「人性皆善、而覺有先後、後覺者必效先覺之所為、乃可以明善而復其初也。」「論語集注」衛靈公「子曰、有教無類。」朱子注「人性皆善、而其類有善惡之殊者、氣質之染也。故君子有教、則人皆可以復於善、而不當復論其類之惡矣」、つまり、その生まれながら備わっている「善」「理」「性」、ここでは、即ち「仁義」の心)に戻ることを望まないことはない、ということ。)しかし、そちらが

自分からこちらに来て学びを請うということを知らなければ、こちらから出向いて教えるという礼がないのである。それ故に、もし「礼を以て来れば」〔『論語注疏』述而「自行束脩以上。」邢昺疏「是知古者持束脩以為礼。然此是礼之薄者、其厚則有玉帛之屬、故云以上以包之也」、つまり、恐らく、「最も値段の安い「束脩」でもいいし、「束脩」より高値の贈物でもいいが、それを持って教えを請いに来たならば〕の意であろう）、教えないことはしないのだ。

脩、脯也。十挺為束。古者相見、必執贄以為禮、束脩其至薄者。蓋人有生、同具此理、故聖人之於人、無不欲其入於善。但不知來學、則無往教之禮、故苟以禮來、則無不有以教之也。